

時を遡る

ジョーンズ・キャリバーを始め、クルト・クラウスの永久カレンダーを搭載した「ダ・ヴィンチ」や「ポルトギーゼ・シデラーレ・スカフージャ」など、IWCの歴史に大きな足跡を残し、その成功の礎を築いた10のモデルがありました。

ジョーンズ・キャリバー

スイスで先進技術を取り入れた製造体制を築き、最高品質のポケットウォッチ・ムーブメントを米国市場に安定供給する。この明確なビジョンのもと、フロレンティン・アリオスト・ジョーンズは1868年にインターナショナル・ウォッチ・カンパニーを設立します。そして1870年頃、ジョーンズ・キャリバーが完成しました。プラットフォーム方式を採用して各キャリバーを特定の「パターン」に分類し、その中でも最高品質のものを「パターンH」と呼んでいました。当時スイスで一般的であった、指のような形をしたフィンガーブリッジは使用せず、米国で普及していた3/4輪列受を採用したのは、より丈夫なことで量産が容易であったためです。他に、ウルフティースと呼ばれる特殊な形状をした歯をもつ歯車や、手の込んだ仕上げが施された地板やブリッジなども特徴としていました。どのキャリバーでも長い緩急針を使ってテンポの振動を調整することができ、この緩急針は後に「F. A. ジョーンズ・アロー」と名付けられました。

パルウェーバー・ポケットウォッチ

1884年夏、IWCがデジタル時代の到来を告げます。数字が切り替わって時刻を表示するデジタル式ポケットウォッチの第1号がIWCから出荷されました。オーストリア・ザルツブルクの時計師、ヨゼフ・パルウェーバーにちなんで「パルウェーバー・システム」と呼ばれたこの仕組みでは、大きな数字が記された回転ディスクを使って時と分を表示します。当時IWCの社長であったヨハネス・ラウシェンバッハ・シェンクはこの新技術に感銘を受け、針を持たない時計として特許を取得しました。しかし、大きなエネルギーを要する表示ディスクの切り替えに間欠歯車を使っているため、パルウェーバー・ポケットウォッチでは比較的短いパワーリザーブしか確保することができませんでした。IWCでは構造に大幅な改善を加えたものの、パルウェーバー・ポケットウォッチの人気はそれほど長くは続きませんでした。約2万個を製造しましたが、1890年には早くも製造中止となります。その後、今度はクォーツ時計としてデジタル表示が復活を遂げるまで、100年近くもの歳月を要しました。

スペシャル・パイロット・ウォッチ

IWCの社長であったエルンスト・ヤコブ・ホームバーガーが、飛行に魅せられた2人の息子、ハンス・エルンストとドルドルフにインスピレーションを受けて製作した「スペシャル・パイロット・ウォッチ」(Ref. IW436)は1936年に発表されました。その頃、時代はまだ航空黎明期で、ほとんどのパイロットが懐中時計を使用していました。飛行専用に腕時計を開発するというのは、実に革新的な発想だったのです。コックピットでの使用に耐えるこのタイムピースは、耐磁性脱進機を備えたキャリバー83を搭載していました。マイナス40度からプラス40度という広い温度範囲で確実に機能するという信頼性は、当時、暖房設備もないコックピットで風雨に耐えなくてはならなかったパイロットにとって非常に重要な性能でした。飛行時間は回転式ベゼルを使って設定することができました。ブラックの背景に夜光性の針と数字が映えるコックピットを模した明確な文字盤は、悪条件下でも高い視認性を確保し、そのデザインは現在のIWC「パイロット・ウォッチ」コレクションまで脈々と受け継がれています。

ポルトギーゼ

1939年、2人のポルトガル商人がシャフハウゼンを訪れ、マリン・クロノメーターに匹敵する精度を備えた大型腕時計の開発を依頼しました。ポルトガル商船の船長や将校たちが、腕に装着できる大きな時計を求めているのです。そこでIWCの開発設計者は、男性用ポケットウォッチ・ムーブメント、キャリバー74を腕時計ケースに収納するという方法を考案しました。スモールセコンドがリュースに対して90度に配置されたハンタータイプのキャリバー74は腕時計に最適であり、さらに卓越した精度も備えていました。直径41.5mmのケースを備えた初代「ポルトギーゼ」(Ref. IW325)は、当時一般的であった腕時計のサイズに比べ大きいものでした。文字盤を囲むレイルウェイ分目盛りや、アラビア数字、スリムなリーフ針といった特徴が、コレクションの核をなす時代を超越したエレガンスを演出していました。

キャリバー85と「インデュニア」

1950年、IWC初の自社製自動巻きムーブメント、キャリバー85が発表されました。その開発の陰には、当時技術部門の責任者であったアルバート・ペラトンの存在があります。キャリバー85は何よりも非常に効率の高い巻上げ機構を特徴としていました。当時、流通していた大多数のムーブメントと一線を画したのは、ローターがどちらの方向に回転しても主ゼンマイが巻き上げられるという構造です。軸受が偏心に配置されたディスクが、ローターの回転運動をロッキング・バーの振動へと変換します。ロッキング・バーに固定された2本の爪が、一番車に噛み合って歯を引っばる動作と、歯の上をスライドして先に進む動作を交互に繰り返します。これにより、ローターのはほんのわずかな動きでも、ゼンマイを巻き上げる動作として活用することができます。ペラトン自動巻き機構を備えたキャリバー85は、時計業界の中で好評を博し、1955年に発表された初代「インデュニア」(Ref. IW666)に搭載されました。一般家庭で磁界を発生する電化製品が増加していたことを受け、このモデルには、磁界の影響からムーブメントをしっかりと保護する軟鉄製インナーケースも採用されていました。

アクアタイマー

1960年代、スポーツとしてスキューバダイビングを楽しむ人々が増加していました。こういった時代を背景に、1967年、バーゼルで開催された時計見本市で、IWC初のダイバーズウォッチ「アクアタイマー」(Ref. IW812AD)が発表されます。伝説の自動巻きキャリバー8541を搭載したこのモデルは、水深200mまでの防水機能を備えていました。潜水時間の設定には、従来のアウトバーゼルに代わり、専用のリューズで操作する回転式ベゼルがガラスの下に装備されていました。ベゼルを内側に収納することにより、時計の防水性を損なわないのがこの構造の何よりのメリットです。ブラックの背景に夜光性の大きな数字と針を組み合わせた文字盤が、深海や視界の悪い状況下でも優れた視認性を発揮し、ダイバーはいつでも潜水時間を把握できます。

IWC ボルシェ・デザイン・チタニウム・クロノグラフ

チタニウムは重さがスチールの約3分の1と軽量で、しかも非常に丈夫です。肌にもやさしく、他の素材では得られないマットグレーの表面を備えます。その一方で、強靱であるがゆえに加工しづらいという難点があり、そのため、長きにわたって時計のケースには不向きであるとされてきました。しかし、IWCは敢えてこの素材に挑み、フランスのアエロスペースなど、航空宇宙業界のスペシャリストたちとの密接な交流を通してチタニウム加工におけるノウハウを習得します。そして1980年、「IWC ボルシェ・デザイン・チタニウム・クロノグ

ラフ」(Ref. IW3700)が完成しました。世界初、チタニウム製ケースを備えた腕時計の誕生です。2年後には、同じくチタニウム製ケースと200気圧の防水性能を備えたダイバーズウォッチ「オーシャン 2000」がこれに続きます。このモデルでもデザインを手掛けたのはドイツの工業デザイナー、フェルディナント・A・ポルシェです。その後も、ブラックセラミックを始めとする革新的なケース素材が発表され、IWCは先進の素材加工技術でスイス時計産業を牽引する力となりました。

ダ・ヴィンチ・パーペチュアル・カレンダー

IWCの歴史に大きな足跡を残したという点において、クルト・クラウスの永久カレンダーを搭載した「ダ・ヴィンチ・パーペチュアル・カレンダー」の右に出るモデルはありません。クォーツ時計の台頭で時計産業がいわゆる「クォーツショック」に喘ぐ中、時計技師のリーダーであったクルト・クラウスが機械式の永久カレンダーを開発するという構想に取り組みます。天才的とも呼べるシンプルな構造に82個のパーツを組み込んだカレンダー機構がクロノグラフと一体化し、1985年に「ダ・ヴィンチ」モデル(Ref. IW3750)として登場しました。閏年も含め、各月の日数の違いを自動的に認識するこのカレンダーは、2100年まで一切の調整を必要としません。長期にわたって時計を使用しなかった場合にも、リューズ操作ですべての表示を簡単に調整できるという、他に類を見ないスマートな機構です。優れた使いやすさに加えて4桁の西暦表示という新機能も備え、さらに、搭載されたムーンフェイズ表示は、実際の月の満ち欠けとの間に生じる差が122年間にわずか1日分という驚異の精度を誇りました。

ビッグ・パイロット・ウォッチ

「ビッグ・パイロット・ウォッチ 52 T. S. C.」にインスパイアされて2002年に登場したのが、直径46mmという堂々とした風格の「ビッグ・パイロット・ウォッチ」(Ref. IW5002)です。標準的な機能を備えたコックピットデザインのモデルが、高級腕時計の世界にカムバックを果たしました。マットブラックの文字盤、「12時」位置のトライアングル・インデックス、高い視認性を発揮する夜光塗料を施した大型の数字と針といった、歴史的な初代モデルで採用されていたデザイン要素が受け継がれています。大型でとても掴みやすいリューズやオーバーサイズのストラップは航空黎明期の名残です。パイロットが、キルティング加工された飛行服や分厚い手袋を着用していた当時は、発進直前に時計の針を同期させる操作やリューズの巻上げも一苦勞でした。駆動部を担うのは、IWCで最も大型の自動巻きムーブメント、キャリバー5011で、ペラトン自動巻き機構と7日間にわたるパワーリザーブを備えます。168

時間が経過するとムーブメントを完全に停止する特殊な機構により、主ゼンマイのトルクが弱くなった状態で時計を作動し続けることはありません。「3時」位置のパワーリザーブ表示が、停止までの残り時間を正確に知らせます。

ポルトギーゼ・シデラーレ・スカフージア

「ポルトギーゼ・シデラーレ・スカフージア」(Ref. IW5041)は、IWC シャフハウゼンがこれまで手掛けてきた時計の中でも、最も複雑な機械式時計です。開発に10年の歳月を費やしたこのタイムピースでは、文字盤に「ポルトギーゼ」コレクションのクラシカルなデザイン様式が採用されています。特許取得の技術、コンスタントフォース・トゥールビヨンが輪列を伝わる駆動力の流れから脱進機を切り離します。完璧なまでに一定の力がテンプに伝達されることにより、振り角が一定に保たれ、非常に高い精度を確保します。太陽時に加えて、通常の時刻より1日が約4分短く、天文学でよく用いられる恒星時也表示されます。また裏側には、オーナーのご希望に合わせて一つひとつ調整される回転式の星座盤を備え、一年を通して特定の場所から実際に見える夜空を毎日正確に再現します。さらに、夏時間と冬時間の区別を考慮した日の出と日の入りの時刻も表示されます。

IWC シャフハウゼン

スイスの時計メーカー、IWC シャフハウゼンは1868年の創業以来、永遠の価値をもつ時計を製造し続けています。技術革新と創意工夫に情熱を傾け、世界的な名声を確立するに至りました。そして、世界をリードする高級時計ブランドとして、究極の精度と独創的なデザインを融合させ、高級時計製造のマニファクチュールならではの傑作を世に送り出しています。IWCは環境と社会に対する責任を果たす企業として、持続可能な製造の実践、子供たちや若者を対象とする活動に取り組む世界各国の組織の支援、そして環境保護を専門とする団体との提携を行なっています。

DOWNLOADS

ジュビリーコレクションの新モデルの画像は、press.iwc.com からダウンロードをしていただけます。

FURTHER INFORMATION

IWC Schaffhausen
Department Public Relations
E-Mail press-iwc@iwc.com
Internet press.iwc.com

インターネットおよびソーシャルメディア

Web iwc.com/ja
Facebook facebook.com/IWCWatches
YouTube youtube.com/iwcwatches
Twitter twitter.com/iwc
LinkedIn linkedin.com/company/iwc-schaffhausen
Instagram instagram.com/iwcwatches
Pinterest pinterest.com/iwcwatches
Blog iwcblog.com